

占領期資料収集プロジェクト研究会—初期を中心に—

第2回

泉 昌一
政治史料課編

開催日時：2014年6月18日 15:00～17:00

場所：国立国会図書館東京本館 本館5階共用会議室4

講師：泉昌一（元国立国会図書館専門調査員）

泉 昌一（いずみ しょういち）

1975年4月から1978年4月までの参考書誌部法律政治課長在職当時、GHQ/SCAP資料収集事業の企画・立案にかかわった。

たぶん私に期待されているのは、そもそもの発端、GHQ資料の収集をどういういきさつで始めることになったかから実務作業がスタートするまでの裏方の話をする事だと思います。

五百旗頭真氏からの陳情

1975年の5月か6月頃、津田塾大学で日本国際政治学会の年次大会がありました。そこで初めて政治学者の五百旗頭真（神戸大学名誉教授・元防衛大学校長）さんに会いました。今や有名ですが、当時は確か広島大学の講師だったと思います。私の友人で、もう亡くなった国際政治学者の佐藤栄一（元桜美林大学教授）さんという方がおまして、彼が引き合わせてくれました。そのとき五百旗頭さんから、「GHQ資料を調べに若手研究者が個々バラバラにワシントンの公文書館まで足を運んで、しかも、収集してきた資料は独り占めにして他人に見せない風潮がある。経済的にも時間的にも非常にムダが多い。なんとかならないか。」と言われ、私は本当に驚きました。実はそれまで、日本占領期の研究に対してほとんど私は関心がありませんでした。これが、まずそもそもの発端です。

ただ、五百旗頭さんが後年書いた文章の中で¹⁾、「国際政治学会に参加していた」という、そこはいいのですが、「その後、国会図書館のスタッフを広島へ送ってきた」と書いてあるのは、これは何かの勘違いか間違いです。あるいは誰か図書館から広島大学へ出張した人がいたかもしれませんが、私の知る限り、五百旗頭さんに会ったという人の話は聞いてないです。

高橋徳太郎さん、朝日新聞の記事

それで、GHQ資料の話の参考書誌部内の課長会議の時にまず話しました。私にもその先どうなるかまったく見当がつかなかったのですが、一肌脱ぐ価値があるというのは心の中にありました。その後、今から思いますと、たぶん小笠原正治参考書誌部長が総務部の副部長をしていた高橋徳太郎さんにこの件を話したのだと思います。

高橋さんというのはすごく勤がいい人でした。その直後に、彼の勤の良さとか、判断の良さをすごく感じさせられる出来事がありました。その年(1976年度)の職員の在外研究には、法律政治課の熊田淳美さんが行くことに決まっていたのですが、行く直前になって、それが米国のストランドにある公文書館の分館にGHQ資料の下調べに重点を置いた研究へと方向が変わったんです。高橋徳太郎さんの主張とか彼の思惑どおりになって、これが後々、例の『朝日新聞』の記事につながったわけです。²⁾

高橋さんは、GHQ資料収集において、リーダーシップを発揮してくれた図書館の幹部として、一番印象に残っている人です。その後の大蔵省との予算折衝などでも、あの『朝日』の記事がなければ、あれほどスピーディーに、しかも予想外の大盤振る舞いで予算を付けてくれることはなかったと思います。

-
- 1) 「これ〔学会報告〕を聞いていた学会員のうちに、国立国会図書館のI〔泉昌一〕課長がいた。彼は国会図書館のスタッフを広島へ送ってきた。戦後日本の設計図となったワシントンの原文書を日本人が日本で見られるようにできないか、と訊ねて来たのである。」(五百旗頭真「原資料とのおつきあい」『神戸大学附属図書館報』Vol.8 No.2 1998.7 pp.1-2 □内は編者補記)
 - 2) 「占領期の米極秘文書 入手進む」『朝日新聞』1976年11月10日朝刊 1面
「続々と“戦後裏面史”」『朝日新聞』1976年11月10日朝刊 3面

米国出張 マッカーサー記念シンポジウムに出席

在外研究から戻った熊田さんが、下調べというより、ほとんど本格的な研究結果を図書館の『月報』にも書かれ、『朝日新聞』が大々的に報道してくれました。あそこまで新聞に出た以上、もう後には退けませんので、収集にあたるのは当然という雰囲気が出来上がってしまいました。

そんな矢先、ちょうど翌年の1977年の4月の上旬に、ヴァージニア州ノーフォークのオムニ・インターナショナル・ホテルというところで、マッカーサー記念シンポジウムがあることを知りました。このことは占領期研究者の袖井林二郎（法政大学名誉教授）さんから教えてもらいました。そこで、まずそこへ行くのを一つの手がかりにしようと、私とそのシンポジウムに参加することになったのです。

4月12日に東京を出発して、時差がありますから同日ワシントン着。シンポジウムは14日から始まるので、13日に『サンケイ』のワシントン特派員をしていた増井誠さんと一緒にワシントンの空港からノーフォークまで同行して、その日はマッカーサー記念館を見学しました。14日からシンポジウムとセミナーが二日間ありました。

私は、このセミナーで初めて、この収集事業でのカウンターパートである米国国立公文書館のジェームス・ヘイスティングス（James Hastings）さんと、挨拶程度でしたが面識を得ました。彼はそのときに、私の話し方がそうだったのかもしれませんが、「日本人はちょっとせっかちだ、ちょっと話の進め方のテンポが速すぎる」というようなことを言ったように思います。

しかも、スートランドはコピー関係の器材が貧弱で、とても日本の期待にすぐには応えられない、というようなことも言っていました。そのときだったか、私は小笠原参考書誌部長から、日本の業者の機械を持ち込んで業者の人間がコピーを撮る、という話をちょっとしてきてくれと言われてましたので、その話を持ち出したのですが、彼ははっきり、「それは無理だ、アメリカにも優秀なマイクロ業者がいるし、とても日本人が資料室の中でマイクロを撮るなんて考えられない。」と言うので、その話はすぐにダメになりました。

記憶が曖昧ですが、プログラムによれば、2日目（15日）のシンポジウムで、ヘイスティングスさんとフランク・シュルマン（Frank Joseph Shulman）さんが話をしたようです。

二日間のシンポジウムが終わった後、16日にノーフォークからワシント

ンへ帰る飛行機の中で、GHQ/SCAPのLegal Section（法務局）の法律課長だったオプラーさん（Alfred Christian Oppler）と話をしました。また、ナショナル・エアポートに到着後には、Government Section（民政局）の国会・政治課長を務めたジャスティン・ウィリアムズさん（Justin Williams）から、彼の占領時代の思い出を色々聞かされました。

17日日曜日、スミソニアン博物館を見学した後、日本人研究者と食事をしたのを覚えています。18日の月曜日、スートランドでヘイスティングスさんと本格的な話をし、彼から書庫の中を案内してもらったり、あるいは西ドイツの国立現代史研究所から来ていたヤコブマイヤー（W. Jacobmeyer）さんと話をしたり、3人で食事をしたのを覚えています。

NARSとの交渉

19日、ジェームズ・オニール（James O'Neill）NARS副館長に都合をつけていただき、ヘイスティングスさんと一緒に訪問しました。オニール副館長からは、「だいたいの話はヘイスティングスさんからよく聞いている。特に注文をつけるようなことはない。2人で話し合って詰めてほしい」というようなことを言われました。

非常に都合がよかったのは、オニールさんをよく知っている日本のアメリカ研究者がいまして、その方と渡米直前のアメリカ学会で会って、近くNARSへ行くと言ったところ、「それなら、オニールに元気だと伝えてください」と伝言を頼まれました。シカゴ大学の歴史学部の大学院で一緒だったそうです。それで気をよくしたのか、オニールさんは、確かイギリスのセツルメントがテーマの修士論文だったと思いますが、その抜刷を持ってきて、サインをして私にくれました。

それから20日、NHKの日高義樹さんと、NHKのクルーもいましたが、一緒にメリーランド大学図書館を訪問して、そこでシュルマンさんと司書の奥泉栄三郎さんに会い、（現在の）プランゲ・コレクションを見学しました。

21日午前、スートランドでヘイスティングスさんと最終的な打ち合わせをしました。大まかな合意点を彼が整理して、それをタイプしたものにふたりにサインをしました。それは実務者同士の暫定的な合意メモで、そういうサインの様式があるのか、サインはイニシャルだけにしました。この合意メモは、その後、ヨーロッパを周って帰国したものですからだいぶ遅れましたけども、帰国してから小笠原部長に渡しました。それは私の手元にはもうないです。

だいたいそういうことで、約10日ばかりワシントンに滞在しまして、一応、ほとんど我々が考えた線に沿った、資料選び、複写が可能になったのです。

《質疑応答》

英語版の熊田論文をマッカーサー記念シンポジウムで配布

(泉) 熊田さんが『月報』に書いた論文の抜刷を30部だったか持って行って、シンポジウム参加者に配りました。

(熊田) それは英文のほうですよ？ 泉さんがアメリカに行かれるというので、『月報』掲載のために書いていた原稿を元にして、英文に書き直したものを持って行っていただいたんです。もちろんタイプ印刷ですけど。A4版ぐらいでタイプ印刷して、それを30部ぐらいホチキスで留めて。その時点では、日本語で書いた論文が掲載されたNDLの『月報』はまだ印刷されていなかったかもしれません。ちょっと、その前後関係ははっきりしませんが。

国会の動き

(参加者) GHQ資料収集の実現に何が幸いしたのか、例えば国会筋からの応援があったとか、ふり返ってどうお感じになりますか？

(泉) 国会方面からのプレッシャーや動きについては、私は全然覚えてないですね。私個人にはそうした情報が知らされることはなかった。ただ国会会議録によれば、質疑に関しては、わりと話の辻褄が合ってますので、館長以下、上層部には、かなりあったかもしれません。あらかじめ議員の秘書を通じて話を聞いているでしょうし。でも、GHQ資料を集めるという態度はNDLとしてすでに決まっていたし、大蔵省の予算当局を含む外部のコンセンサスがあって、反対する人はいなかったので、圧力などは無かったと思います。

(参加者) 国会で審議されるというときには、相談はありましたか？

(泉) いや、何もなかったですね。

学会からのほたらきかけ

(参加者) アメリカ学会でもGHQ資料収集に関して何か動きがあったのでしょうか？

(泉) アメリカ学会では、私がちょっとした紹介文を会報に書いたでしょ。³⁾あれでほとんどの人が初めて知ったんです。それくらい関心がなかった。自分も含めて、アメリカ学会の中で「対日占領」というのは、スコープの外にあったんですね。今でも研究している人はほとんどいないですよ。袖井林二郎さんにしても竹前栄治（東京経済大学名誉教授）さんにしても、アメリカ学会には入っていらっしやらない。

(参加者) 当時その少し前に、米国議会図書館にあった内務省検閲による発禁本の返還問題⁴⁾がありましたが、それがGHQ資料の収集をしようという雰囲気醸成に影響したということはありませんか？

(泉) 発禁本の返還問題が一つの梃になってますよね、確かに。でも、GHQ資料を研究しようという人たちは、この件についてまったく知らなかった。関心がなかった。

NARSアーキビスト、ヘイスティングスのこと

(参加者) ヘイスティングスさんと交わしたという「協定」の中味はどういうものだったのでしょうか？

(泉) 協定と言うほどのものではないですが、まず覚えているのは、最初にマイクロフィルム化する資料はGovernment Section（民政局）だと、彼から言い出したんですよ。Government Section からやろうと。それは一番整理されているからかもしれない。私は、そんなこと書かなくていいと思ったんですが。

3) 泉昌一「GHQ/SCAP資料の一括収集について」『アメリカ学会会報』（46）1977.9, pp.1-2

4) 藤本守「アメリカにおける日本占領関係資料収集の現在—2010年～2015年—」『参考書誌研究』77号, 2016.3, p.15

(熊田) ヘイスティングスさんのことですが、彼のことを紹介すると、私が出張したときにも主に彼が交渉の相手、話の相手でした。NARSのストランドに所属しているアーキビストのひとりで、主に日本関係、ドイツ関係、つまり広い意味での第二次世界大戦関係担当のアーキビストだったわけです。ですから、私も泉さんも彼に会ったということです。彼から、GHQ資料の収集計画について、「日本は金持ちだか何だか知らないけれど、急ぎすぎじゃないか」「全部一括収集だなんてムチャだ」と言われたんです。

(泉) 非常に残念なのは、ジェームス・ヘイスティングスという青年が、年はいくつで、どこの大学とか、どこの州の出身かとかについて未だにぜんぜんわからない。アメリカに行っている間に調べるのはちょっとできなかった。しまったなあと帰ってから思いましたよ。ぜんぜんわからない。彼のパーソナリティに、私は非常に感謝している。大人しいんだよ。すごく紳士的な人だった。あの当時30歳ぐらいだったのかなあ。

(熊田) その後、GHQ資料収集の予算が決まって、初代のワシントン駐在員となる星健一さんと一緒にNARSに行った時の交渉相手は、ガッキンという人で、ポジションがよくわからないけど、明らかにヘイスティングスさんよりも上で、ストランドのレコードセンターの長だかその次くらいの地位の人でした。

(泉) ストランドに自分のルーツ調べに来ている人を相手にするアーキビストは、はるかにヘイスティングスさんより上の、年配の人だった。日本占領資料、GHQ資料そのものの地位も低かったということです。

(熊田) そうですよ。ヘイスティングスさんに見れば、印象として、すでに収集に来ている西ドイツのチームは専門的な歴史学者が来て選択収集でやっているのに、日本は図書館の職員がやって来て全部収集すると言う。そんなのムチャだという印象が彼にはあったと思う。それを泉さんが行ったときにも引きずって、「もしやるなら、Government Section から見たらどうか。」。そんなことで合意メモに入れたのではないかと思います。

GHQ資料収集事業の予算のこと

(泉) そのときには調査費がついていました。調査費というのは、一年目はゼロが普通らしいのですが、それがついたというので、会計というか、高橋徳太郎さんなんかもすごく驚いていました。

(熊田) ものすごく短時間で予算がついた。『朝日新聞』の記事は、出張報告を書くか書かないかというぐらいの時点で、総務課の前の部屋に連れて行かれて、新聞記者に色々話をしました。ですからそこに書かれている記事の内容は、あたかもこんな資料を全部集めてきたみたいになっていますが、これは、サンプルで収集してきたものを適当にアレンジして話をしたことが記事になっているんです。こういうものが存在して、他にもまだ沢山あるんですよという記事になったということが、広い意味で予算当局を動かした。

また、国会のほうでは、中川秀直衆議院議員を含めてですけど、「GHQ資料は、どうなるんだ。」という質問ではないですよ。さらに⁵⁾寺前巖衆議院議員の質問は、メリーランド大学図書館にあるGHQによる検閲資料、プランゲ・コレクションに関心があつたわけです。⁶⁾GHQ資料に対する国会議員の関心はそれほどなかった。収集が決まったのは、国会筋からの要請というより、大蔵当局の理解ですよ。

例の新聞記事をめぐって

(泉) 『サンケイ』のワシントン特派員だった増井誠さんは、今どうされているのでしょうか。

(熊田) その後産経新聞東京本社編集長になられ、2005年に亡くなられています。ついでに言うておくと、当時はまだNDL記者クラブはなかったのですが、この件について『朝日』だけが書いたというか、まあ『朝日』のスクープだったわけです、一面にも載った。でも実は、GHQ資料を全体としてまとめて収集したいんだという構想自体は、一番最初、出張に行くときから、ほんやりとはあって、そのためにはまず調査したいというときに、その手助けをしてくださったのはワシントンにいらした増井さんなのです。増井さんと一緒にアーカイブスには行かなかつたけれども、増井さんのガイドと

5) 第80回国会 衆議院内閣委員会1977年3月15日 内閣委員会議録第7号

6) 第82回国会 衆議院外務委員会1977年11月16日 外務委員会第7号

いうのはすごく大きかった。だから、NDLがGHQ資料の収集について関心を持っているらしいというのを増井さんのほうが先により強く感じていたはずなんです。

(泉) 当時、同じころかなあ、『サンケイ』が日本国憲法の成立史みたいなのをシリーズで書いてたんですよ⁷⁾。

(熊田) それが私の出張の直接のきっかけになったようなものですよ。ストランドにそういう資料群があると知ったんです。その記事の連載は1975年です。

(泉) だから『朝日』の記事は『朝日』の記者にとってはスクープだけど、増井さんにとってはね、ショックだし、私も申し訳ないなあという気がしましたね。でも『朝日』の記事はね、あの影響力たるや大したもんですね。

(熊田) そうです、それは非常に大きかった。改めて記事を見たら、具体的なことはあまり書いてないですよ、どういうふうに収集するとか。こういうものがあるよ、とだけ。非常にうまいですよ、そういう意味では。おかげでその後、研究者から反響があったりして、そういう影響力があの記事にはありました。でも、あれで、ほかの新聞社が書けなくなっちゃったから。ほんとはほかの新聞社も書いてくれたらよかったですけど…。

NDLの使命である

(泉) 今、ひとつ思い出しました。大蔵に予算要求したときに、文章を私が書いたんです。そのなかに、日本国際政治学会のこういう人たちから陳情がありましたということを書いた。これに先生たちの名前が出ている。出してもいいですかと了解を取って書きました。

(熊田) それは、いちばん最初に出す予算説明資料に出ていると思います。おそらくそれを泉さんが起草されたのだと思います。

7) 前稿「[「占領期資料収集プロジェクト研究会(初期を中心に)」第1回]注4) 参照。

ある意味、NDLが一番熱心だったと思います。泉さんを含めて上層部が、非常に大蔵省をプッシュした。いくら崇高な理念であっても、大蔵がウンと言わないとどうにもならないところがある。とにかく、周りよりNDLの中が非常に熱心であったというかな、オーバーな話でいうと、NDLのレーズンデートル（存在意義）ね、国を代表してこういう仕事をするんだ、そういうのが高橋さんにあったかどうかわからないけど、少なくとも私にはありました。まとめてやる（収集する）のはNDLの使命だという気持ちが私にはありました。